

1920年代前期における学生運動の諸相（上）

——京都帝国大学社会科学研究会を中心に——

福家 崇洋†

はじめに

1920年代半ばに起きた京都学連事件は、京都大学の歴史にとって、ひいては、近代日本の社会運動史にとっても特筆すべき意味を持っている。なぜなら、1925年4月に公布された治安維持法の適用対象者を、ほかならぬ官立の京都帝国大学の学生から出すことになったからである。

この事件で検挙されたのは、学生社会科学連合会所属の、しかも、その多くは京都帝国大学社会科学研究会（以下、京大社研）所属の学生たちであった。「社会科学」を研究していた彼らは、1920年代前半における社会運動、労働運動の興隆を背景に、研究活動にとどまらない動きを見せはじめた。京都学連事件は、そのなかで起きた事件であった。

この事件に関する近年の研究をあげれば、佐々木敏二氏執筆の『京都帝国大学学生運動史』（京都帝国大学学生運動史刊行会編、1984年10月、昭和堂）と伊藤孝夫氏の『大正デモクラシー期の法と社会』（2000年12月、京都大学学術出版会）第4章・補論がある。前者は、元京大社研メンバーの回想や山本宣治旧蔵資料を引用・収録しながら、京大社研を中心とする戦前期京大の学生運動史を描き出した。後者は、裁判記録『京都学連事件記録』（京都大学法学研究科・法学部図書室所蔵）や京大当局側の新資料などによりながら、京

都学連事件における「大学内管理と警察権との関係」という問題を考察している。

これらの先行研究に学びながら、本稿が意図したのは以下の2点である。ひとつは、新資料にもとづいて1920年代前半の京大社研の歴史を描きなおすこと、もうひとつは、同時期の学生運動や社会運動の歴史との関係から、京大社研の活動を照らし直すことである⁽¹⁾。

1920年代前半は、日本共産党が結党（1922年夏）から解党をへて党再建に向かうだけでなく、日本労働総同盟分裂、無産政党結党準備運動など社会運動、労働運動が盛りあがりを見せる時代であった。本稿では、日本共産党（および再建ビューロー）から学生運動への影響⁽²⁾、学生運動の全国的組織の興隆、また関東と関西における学生運動の位相などを念頭におきながら、京大社研の歴史を1920年代前半の社会運動、労働運動に位置づけなおしたい。

1 日本共産党と青年運動

1-1 「秘密団」と学生連合会

1922年夏、「第一次共産党」が結党された⁽³⁾。党の青年運動を立ちあげようとしたのが高瀬清である。高瀬は、極東諸民族大会（同年1月、モスクワとペトログラードで開催）に日本代表の一員として参加し、1922年6月に帰国した。さらに

† 京都大学大学文書館助教

同年9月末、高瀬はコミンテルン第4回大会（1922年11月、ペトログラードとモスクワで開催）に参加するため、日本共産党代表の一員としてロシアに向けて出国した。彼らは、この大会で日本共産党の創立を報告した。そのさい、高瀬は共産主義青年インターナショナルから日本共産青年同盟（以下、青年同盟）設立の指令をうけ、翌年1月頃帰国する。

高瀬は、青年同盟の結成過程について次のように回想している⁽⁴⁾。青年同盟の組織準備委員会委員長に佐野学、委員には川崎悦行、荒井邦之介、高橋貞樹、猪俣津南雄、高瀬清が任命された。彼らは、1923年4月に青年同盟を非合法に結成した。暁民会事務所（東京都豊多摩郡戸塚町字源兵衛）が結成の会場で、委員長には川合義虎（本名川江善虎）、顧問として佐野、猪俣、高瀬、委員には川崎、荒井、高橋、岸野重春、高野実が選ばれた。しかし、今日では、コミンテルン文書日本共産党ファイルからもこの過程を追いかけることができる。

このファイルに収録された「日本青年運動の方針及び経過」（1922年9月末頃執筆か、執筆者不明）⁽⁵⁾には、青年同盟の結成準備についてより詳しい内容が記述されている。報告書では、日本共産青年同盟組織の前提として以下3つの方針が打ちだされた。

- (1) 日本共産党青年部専任委員会の指導
- (2) 合法的青年団体の内部に於て是を指導する秘密の共産主義的団体の組織
- (3) 合法的青年団体の組織

つづいて、1922年7月5日から9月25日までの運動状況が報告された。その内容は、基本的には上記の方針にもとづきながら、党員3名で専任委員会を構成し週1回会合を開いていること、委員3名は共産主義的傾向を有する青年8名に対して「合法的青年団体」および「青年共産党」の設立を勧誘したこと、これら青年運動統制のため、

この8名と専任委員会員1名で同年8月7日に「秘密団」を作ったことである。

報告書の筆者が今後の運動上、もっとも有効な方針として打ちだしたのが、早稲田大学学生を中心とした建設者同盟、早大文化会、東京帝国大学新人会といった学生団体が連合した組織を母体として、各大学学生、各職業階級、各地方青年に影響をおよぼしていくことである。

報告書では、そのきっかけとしてロシア飢饉救済運動が考えられた。この運動は、1921、2年、水曜会（山川均を中心）の機関誌的性格をもつ『前衛』（発行所前衛社）を中心に展開され、「飢えたるロシアを救へ」のスローガンのもと全国からの募金をロシアへ送ることが目的であった。

建設者同盟は、前衛社とともに「ロシア飢饉救済金募集」の記事を機関誌『建設者』1号～2巻2号（1922年10月～翌年4月）に掲載したほか、1922年9月に都下の大学が集まった雄弁連盟露西亜飢饉救済会に加盟した⁽⁶⁾。「この運動は、当時社会主義同盟の解散以後から、日本の社会運動に於ける最高のスタッフを形作るために活動しつゝあつた日本共産党（第一次共産党）によつて、当時の対露非干渉運動（シベリヤ撤廃ロシア承認）の側面的運動として発意せられたもの」⁽⁷⁾という菊川忠雄（新人会員）の回想は示唆に富む。なお、菊川はこの運動の専任として、「党の学生煽動係ともいふべき田所輝明氏」（建設者同盟員でもあった）をあげ、田所は前衛社で「毎日集つて来るロシア飢饉救恤寄付金を記帳し」、「毎日百五十円を下らない寄付額に対して、この運動の成功を誇つてゐた」⁽⁸⁾という。

この運動の「成功」が、学生運動の全国的結集に向けてひとつのきっかけとなったことはたしかである。前掲の「日本青年運動の方針及び経過」には9月1日以降の「秘密団の団員」の活動として「(a) 新人会、建設者、文化会の各々に属する秘密団員は其所属の会に向つてロシア飢饉救済運

動を全国学生にて行ふべきこと並にひいて全国青年同盟を組織すべきを提議し、各々其大会に於て是を可決し、其委員を選任せり。／(b) 右の委員は各大学の弁論部に向つてキキン救済運動を共同にすべきことを提議し其賛成を得たり。／(c) 右の委員は学生以外の団体(例、長野県自由青年連盟、東京社会思想社、種蒔き社、熊本市社会主義研究会、秋田小学教員同盟等)にも交渉し其承諾を経たり」⁽⁹⁾とある。

その具体的なあらわれが、学生連合会の結成であった。発会式の日は1922年11月7日(ロシア革命記念日)である。集まった約50名の一部は、菊川によれば、学生というより「社会主義青年」であり、他団体にも籍を置く「『二重国籍』者」であった⁽¹⁰⁾。また、同じ新人会の後藤寿夫(筆名林房雄)によれば、「集る者は皆一個の革命家としての決意(好い意味にも悪い意味にも)を持つて居た」ので、会合と会の存在は「半ば秘密」とされた⁽¹¹⁾。たしかに、『建設者』掲載の日誌11月7日条には伏字はあるものの、会結成に関する記述はない⁽¹²⁾。

前掲「日本青年運動の方針及び経過」にある「今後の方針」には、「(a) 上述の如く成立したる飢民救済学生連盟を動かして演説会等を出来る限り頻繁に開かしめ各大学々生間の連鎖を完全ならしむ (b) 上述学生連盟を全国学生同盟に変形せしむ〔、〕更にこれを全国青年同盟に変形せしめ合法的青年団体の成立を一日も早からしむ」⁽¹³⁾ことが記され、この飢饉救済運動から学生連合会の結成が、党のシナリオに沿っていたことがわかる。

学生連合会には、東大新人会、早大文化会、建設者同盟、明治大学七日会、早稲田高等学院、社会思想研究会、日本大学社会批判会、第一高等学校社会思想研究会、第三高等学校社会問題研究会、第五高等学校FR会、第七高等学校鶴鳴会、新潟高等学校文化会などが加盟した。翌年1月末には高等学校連盟(HSL)が結成され、一高、三高、

五高、七高、佐賀高、浦和高、新潟高の7校が参加した。

1-2 党青年部と日本共産青年同盟

日本共産青年同盟結成が党議として決定されるのは、高瀬清によれば、翌年2月に開かれた市川党大会であった⁽¹⁴⁾。コミンテルンに送られたと思われる「市川大会速報報告書」(1923年2月18日、日本共産党総務幹事堺利彦、国際幹事佐野学の署名)⁽¹⁵⁾には「ユース」のために、党はビューローを組織した。共産青年同盟はまもなく組織されるだろう。それは23歳以下の党員と、他の信頼できるプロレタリア青年から成る。組織ができる時点では、全同盟員数は百名をこえると思積もられている。」という報告がある。ユースとは青年同盟を、ビューローは青年部を指すと思われるが、前出の「秘密団」との関係は明らかではない。

その1か月後にコミンテルンに送られたと思われる「市川党大会詳細報告書」(1923年3月25日、日本共産党執行委員会総務幹事堺利彦、国際幹事佐野学の署名)⁽¹⁶⁾でも青年運動について報告され、「第2回党大会までの日本共産党」のなかの「4青年部」に次の記述がある。

この期の青年部の主たる活動は、学生と農村青年の組織化であった。23の大学、専門学校、予科、高等技術学校に共産主義者の地下組織を設けることに成功した。それは、ロシア飢饉救済、リープクネヒト記念日のデモ、プロレクラト〔プロレタリア文化〕運動のような、さまざまな合法運動を組織した。農村地域では、6つの公認青年団体に潜り込み、4つの青年共産主義クラブをつくることに成功した。青年労働者階級党員がプロフィンテルン組織化促進に専念しなければならないので、青年労働者のなかでの活動には多少時間がかかることになった。

学生運動との関係では、学生連合会の結成を党

の活動実績として報告しているが、先の青年同盟員の見込み数と同じく、過大報告の可能性がある。後記される「今日の状況」内の「4 青年部」にも、「党の青年部は日本共産青年同盟結成の準備を終えた。同盟は来月（4月）初めに結成される。それは100人以上のメンバーから成り、半分はその指導力としての若い共産党員である。日本共産青年同盟は、地下組織であり、現在の日本共産党青年部に代わって、独立した活動単位となる。」とあり、同じ傾向であったと思われる。

党青年部については、同年6月頃作成されたとされる「日本共産党と青年運動」（1923年6月、さのと日本語で筆記）⁽¹⁷⁾に、内部の体制や事業などより詳しい記述がある。それによると、青年部は「十名の委員より成りEC〔執行委員会〕の統制の下に立つてゐた」らしく、下記の事業を計画していた。「(a) 青年運動の意識を無産青年の間に喚起し其必要を宣伝する事 (b) 農村に於ける官設青年団の破壊若くは改造を企てる事 (c) 各地の社会主義的青年と連絡するに力め各地に新しき青年団体を作るに努力する事 (d) 無産賃銀労働者の青年分子を組織化する事 (e) 無産青年及び少年の間に Settlement の事業を行ふ事 (f) 学生の社会主義団体を全国的に組織化する事」。

しかし、同文書で報告された「成績」をみれば、(d) は実現せず、肯定的な表現が使われているのは (f) と (c) である。先の大会報告書に記されていた農村での組織化はここにはない。学生の組織化については、「(a) 学生〔団体——抹消〕の社会主義団体を全国的に結成するに成功した事／学生の社会主義団体は一九一七年頃より発達し帝大の新人会、ワセダの建設者同盟、文化会等が有力であつた。JCP の青年部はこれ等の団体と深い関係を持つてゐたが、更に各種の学校に社会主義団体を創立するに努力し大学程度、専門学校程度の学校約三十に此種のものを創立する事に成功し其連合を全国学生連合会と称した。この団体は宣

伝演説会を屢々催すのみならず、メーデー、労働争ギ等に際して、学生団体として出来得る限りのことをした。」とあり、やはり学生同盟会結成が、党の活動実績として報告された。それ以外には、長野や秋田など地方の青年に対する宣伝をおこなっていること、また労働学校などで講師をつとめて宣伝したことも報告されているが、筆致は控えめである。

日本共産青年同盟が結成されたのは1923年4月である。この成立事情について記した文書はふたつある。ひとつは、先述のさの報告書である。そこには「その規約は各国のYCI〔共産主義青年インターナショナル〕支部の規約を参考し日本の特殊事情に基きて起草せられた」とあるほか、非合法のため党員を広く求めることは「政策上不利」であり、「最初は党員をJCP〔日本共産党〕に既に加入せる青年分子約三十名（十六才以上二十五才まで）に限ることとした」とされる。また青年同盟の体制に関しても下記のように説明された。「YCI 日本支部は七人のECを有する。うち一人はJCPのECより出席するものである。部は組織部、反軍国主義部、教育部に分れる。YCI 日本支部は無産青年運動、反軍国主義、農村青年運動、青年団に対する運動方針等につきてThesesを作り、規則的且つ組織的な活動を開始してゐる。」

もうひとつの文書は、第一次共産党事件（1923年6月）直前に上海に逃亡した人々が書いたモスクワ宛緊急報告書（同年6月執筆と推測）⁽¹⁸⁾である。青年運動との関係では、「JCPの近況」のなかで、「青年部」について説明された。先のさの報告とのちがいをあげれば、青年同盟の組織として「組織部、反軍国主義部、教育調査部」と記されていることである。なにより、この文書には、「青年部のEC」として「GS〔General Secretary〕河合、IS〔International Secretary〕高橋、会計荒井（以上常任）、水島、相馬、佐野（CP）より」と記されているのが注目される（ただし該当箇所

は線で抹消)。この記述が正しいとすれば、青年部総務幹事川合義虎、国際幹事高橋貞樹、荒井邦之助、水島潤三(本名磯田薫一)、相馬一郎、佐野学である可能性が高い。青年同盟は党青年部の事業を継続発展させる形で活動していくが、その行先には弾圧や関東大震災といった大きな障壁が横たわっており、運動が軌道に乗ったかは不明である。

1-3 京都における共産党の影響

これら党報告書に取りあげられた学生運動は、東京を中心に展開されたと考えられるが、京都でも規模は小さいながらも存在していた。

新人会や建設者同盟が結成された1910年代末に、京都でも京大の高山義三(友愛会京都支部長)、古市春彦、水谷長三郎、小林輝次らを中心に労学会が結成された。労働者の教育や啓蒙が目的である。しかし、幹事役の高山の意図に反し、実質的には河上肇を中心とする学内の社会問題研究会の域を出なかった⁽¹⁹⁾。一方で、1920年代初頭になると、学生連合会の加盟団体に三高社会問題研究会が名を連ねているように、京都の学生運動もふたたび全国的な学生運動に呼応する動きを見せはじめていた。

京都は日本共産党との関係が早くからある地域であった。京都の労働運動の指導的立場にあった辻井民之助(日本労働総同盟京都連合会〔以下総同盟京都連合会〕)は堺利彦、山川均、荒畑寒村ら東京の社会主義者と接触し、1922年3月頃からロシア飢饉救済運動にも取りくんでいた。日本共産党結成(1922年夏)前、辻井は、荒畑から党結成にさいし京都の信頼できる労働者を推薦してほしいという連絡を受けとった。そこで、辻井は、谷口善太郎、国領五一郎、国領巳三郎、佐々木隆太郎、半谷玉三を推薦し、その後まもなく荒畑を迎えて辻井宅で会合した⁽²⁰⁾。党の市川大会(1923年2月)に出席した辻井は、労働者出身かつ意識

が高いということで執行委員に選ばれたほどであり、総同盟京都連合会の活動は事実上共産党に指導されていた。

これ以外にも共産党からの影響を示す動きとして、森英吉率いる農民運動を見ておきたい⁽²¹⁾。京都府葛野郡農民運動の中核的存在であった森は、1921年夏に農民組合の確立や無産者階級の生活安定をめざした日本労農同盟を結成した。会長に辻井が、主事に森が就任しているように、総同盟京都連合会の積極的な援助がうかがわれる。1923年1月には同盟内に宣伝部・調査部・教育部・法律部の各部が設置され、顧問に布施辰治、小岩井淨、山崎今朝弥、細迫兼光、高山義三らが就任、機関誌『同志』を発行した。

この『同志』2号(1923年1月20日発行)⁽²²⁾は「リープクネヒト記念号」として、リープクネヒトとローザ・ルクセンブルグへの追悼文、彼らの略伝、「国際青年運動の進化」、「ロシア革命運動の序曲」、プハーリン「ソヴィエットとは何であるか」などの国際関係、国内では過激思想取締法案反対への喚起やロシア飢饉救済運動とロシア非干渉運動への呼応が見られる。『同志』(および後述の『青年運動』)の編集者として桂信三の名が、併記された彼の住所には「森英吉方」とある。この桂は帯の下絵描きの技術者で、1923年2月11日(紀元節)に開かれた京都無産者大会・三悪法反対大演説会に森英吉らと参加、警察と衝突した谷口善太郎を自宅にかくまい、これをきっかけとして労働運動に加わったという⁽²³⁾。

また、『同志』の発行所が「労働新聞支局／農民運動支部 同志発行所取次部」と表記されていたことは興味深い。『労働新聞』は1922年10月橋浦時雄が、『農民運動』は1922年9月浦田武雄、稲村隆一、高津正道、森崎源吉らが創刊した雑誌だが、彼らはいずれも共産党員であった可能性が高く、『同志』が京都における党活動の受け皿となっていたことも考えられる。

この傾向は、『同志』が改題した『青年運動』3号(1923年3月15日発行)にも見てとれる。改題の理由は、山川均の方向転換論(「無産階級運動の方向転換」『前衛』1922年)やヨッフフェ来日(1923年)を契機に、「我等又一層明徹に深広に大衆と歩を合す必要あり」⁽²⁴⁾ というものであった。同誌に掲載された論文と記事は以下のものがある。党の理論的指導者山川均の「全国の無産階級はブルジョアの逆襲に対して一斉に蹶起せよ 過激法案と労働組合法案と小作爭議調停法案」や党員田口運蔵「宗教と労働運動」のほかに「第四回インターナショナル大会略記」「日本に於ける無産青年の運動」「水平大会一日々記」「三悪法案反対後日物語」「日本労農同盟農民学校開催」などである。

山川の論文⁽²⁵⁾は「某新聞に掲載すべきはずのものであったのだがその新聞が都合によつて廃刊同様になつたので、その編輯者の好意により本誌に載せることゝなつた」と編輯者からの注記がある。その内容は「断末魔に迫つた資本主義は無産階級を圧伏する為には、如何なる手段に訴へることを躊躇せぬ」として、三悪法(過激社会運動取締法案、労働組合法案、小作爭議調停法案)粉碎のために一斉決起を呼びかけたものであった。

また無産青年運動を紹介した記事は、自由青年連盟の羽生によって記された。すでに『前衛』1922年10月号には「青年運動の暁鐘」として秋田青年思想研究会の成立や下伊那で既成青年会の破壊をめざす自由青年連盟の創立記事(羽生生)が掲載され⁽²⁶⁾、『同志』や桂たちが全国の青年運動と呼応していった様子がわかる。

さきに日本共産青年同盟の設立を見てきたが、青年同盟の活動は京都とも無関係ではなかった。1923年5月頃には、京都でも青年同盟の支部が結成され、活動を開始していたという⁽²⁷⁾。支部の責任者は国領巳三郎(のち早川忠孝)で、事務所は総同盟京都連合会事務所内に置かれていた(のち

移転)。京都における青年同盟の影響は、前掲「日本共産党と青年運動」にも記載されている。同報告書には、1924年以後の青年同盟の活動として、青年労働者組織のために「労働青年同盟」(会員総数約十名)を結成して教育を主な事業としたこと、早稲田大学の「五月十日以後のワセダ大会の反軍国主義運動に牛耳をとつたこと」に加えて、下記の記述がある。「(b)五月初旬に京都に全国青年団大会が催された、このブルジョア的青年団の大会に対抗して全国無産者青年大会を同日に同じ京都に召集して演説会を催した、それは官憲の圧迫によりてプログラム通りに進行し得なかつたが、大なる宣伝的效果を収めた、同大会には信州、九州、中国其他の遠隔の土地より同志なる社会主義青年の多数が集まつた。」⁽²⁸⁾

これは正確には、5月17日に京都で開かれた全国無産者青年大会を指すと思われる。『京都日出新聞』1923年5月18日付夕刊の報道⁽²⁹⁾によれば、この大会は全日本無産者青年連盟が主催し、その主催者は桂信三であった。また、「裏面の画策者」として「盲人主義者」小野兼次郎の名が記されており、大会前に桂も小野も松原署に留置された。当日の大会では谷口善太郎が司会者となるが、宣言や決議の朗読も官憲により中止、国領五一郎を議長に推して祝電の披露はできたものの、演説会は中止ばかりで最後は解散を命ぜられた⁽³⁰⁾。

一方で、学生たちもまたこうした動きに加わりはじめていた。1923年2月11日には東京・大阪・京都・神戸・名古屋などで悪法反対デモがおこなわれ、ここに学生も参加した。関西では、この運動のなかで関西学生連盟が組織され、三高社会問題研究会、同志社十月会、京大聾人会(ソヴェト会)、大谷大反宗教同盟、立命館労農会、京都高等蚕糸文化会、薬専洛陽新人会、大阪園専赤潮会、大阪高商新ナロード会、関西大反資会、神戸高商新思想会が参加し、デモ検挙者の救援活動や独自の演説会活動を展開していた。

次章では、第一次共産党事件や関東大震災など方針転換をせまられる共産党の動きとその学生運動への影響をおさえながら、京大における学生団体「伍民会」(のち京都帝国大学社会科学研究会)の誕生や学生連合会第1回大会について見ていきたい。

2 「大衆化」する学生運動と京大社研の創設

2-1 党活動の挫折と「大衆化」

結党後の日本共産党は、労働運動、農民運動、青年運動、水平運動に進出しはじめるが、その活動はすぐに頓挫した。第一次共産党事件(1923年6月5日)によって、幹部が検挙されたためである。しかし、5月末、検挙を事前に察知した党執行委員会は、佐野学、近藤栄蔵、高津正道を上海へ脱出させ、辻井民之助もソ連に亡命していた。

この佐野、近藤、高津にすでに在露中の荒畑寒村、間庭末吉を加えて、同年7月頃ウラジオストクで在外ビューローを設立した⁽³¹⁾。同ビューローが日本国内に送った「報告書」(1923年7月8日と露語で筆記)⁽³²⁾では、片山潜、荒畑、和田軌一郎、佐野、辻井、近藤、間庭、高津、小玉三郎、水沼熊、北浦千太郎が「在外日本共産主義者団」を結成したとあり、ウラジオはウラジオで体制を固めつつあった。

一方、検挙後の国内では、党の旧執行委員会が改組され、饒平名智太郎、赤松克麿、北原龍雄らが臨時ビューローを立ちあげていた。しかし、国内臨時ビューローもウラジオ・ビューローとは独自に運動の再興をめざしており、必ずしも再興に向けた運動の歩調は合っていない。

再興準備が順調に進まないなか、関東大震災(1923年9月)が起こった。震災後、青年同盟委員長の川合義虎らが検束され、亀戸署で軍隊によって虐殺された。また、党員が大幅に減少する。いっそうの運動再興が求められるなか、1923年10月23日、国内臨時ビューローは第3回党大会

を開き、臨時ビューローを廃止して、執行委員長饒平名智太郎、委員佐野文夫、赤松克麿、北原龍雄、立田泰、浅沼稻次郎からなる執行委員会を組織した。

佐野文夫と思われる「野田」の署名があるこの大会の「報告書」(1923年11月15日)⁽³³⁾には、党運動方針の転換が記されている。大きく変わったのは、合法運動(政治的統一戦線)への進出と一般大衆との関係である。

無産階級中の少数的分子は絶えず一般大衆によって支持され又一般大衆に向って訴へねばならぬ。しかしそのためには公然の運動でなければ不可能である。故にわれらの党の運動を大衆的運動に進展せしめるため一般大衆の目前に彼等の拠るべき所を示す公然の運動をオルガナイズすることに特別のインポートンスをおかなければならぬ。

このあと当面の任務が政治運動、組合運動、農村運動など個別に述べられた。青年運動は「(a)労働青年」「(b)一般青年運動」にわけられ、後者では次の方針が表明された。「一般青年運動は、(1)都会にあつては現在の状態では学生を主体とし封建的遺物と反動主義とに反対する一切の進歩的自由主義的分子を包含する青年大衆の運動。/(2)地方にあつては都会の学生の場合に照応した運動から出発し、小作人組合運動の擁護、監督官庁と旧来の自治機関とに対し小学教育の地位の擁護、教員組合の促進。/(3)如何なる場合も青年大衆の理解する要求を掲げ、青年大衆を対象とした公然の運動の組織。」つまり、青年運動も非合法から「公然」へ転換し、「一切の進歩的自由主義的分子」もふくんだより広範な青年の獲得がめざされた。

こうした方針転換は、学生運動にも影響をあたえた。学連は1923年10月に総会を開催、ここに60名が集まった。校内運動に関する方針が議論され、下記の方針が確立された。「一、新中間階級

の予備軍たる学生を支配階級より切離す運動たる我々の運動は、先づ大衆的でなければならぬ。真面目な学生の支持を受けるものでなければならぬ。／「少数者のグループより大衆的組織へ！」／二、学生を支配階級から切離す唯一の方法は、社会科学の注入普及にある。それを除いては学生大衆の獲得は不可能である。／「社会主義の普及より社会科学の普及へ！」／三、大衆の教育は、当面の利害を教材としなければならぬ。社会現象、従つて社会科学に冷淡である学生大衆を、我々の分野に引き入れるためには、彼等と共に学生当面の利害のために戦はなければならぬ。／「学生消費組合の運動。学生自治権の獲得運動、研究の自由、大学擁護、等の標語のもとに、学生大衆と共に戦へ！」⁽³⁴⁾であり、学連の方針もまた「大衆化」へと転じていた。

2-2 京大社研と東大新人会

第一次共産党事件から関東大震災にかけて共産党の活動が低迷するなか、1924年に入って京都の労働運動は急速に活発化していく。そのひとつの動きが、同年4月の京都労働学校創立である。すでに前年秋の総同盟京都連合会第3回大会で労働学校創立が決定され、国領五一郎、谷口善太郎、半谷玉三、桂信三が設立準備委員として準備をすすめていた。2月には、上記4名と労働者奥村甚之助、弁護士水谷長三郎が労働学校の設立大綱を決定した。3月1日に開催された労働学校創立記念演説会では1000余名の前で河野密、水谷、山本宣治、山名義鶴、鈴木文治が講演し、4月からの開校に花を添えた。なお、京都労働学校の維持費は山川均、徳田球一、小林輝次、宮崎竜介たちから1～20円が寄付されていたというが⁽³⁵⁾、1925年11月の京都無産者教育協会の設立（本稿下で後述）にともない、維持費は協会に移されることになる。

一方、京都の学生運動では、1923年10月頃、

京都帝国大学の学生によって伍民会が結成された。岩田義道（経・23年入学、松山高等学校、以下入学略）、仙波直心（法・23年）、逸見重雄（経・23年、三高）、岡本猪之助（経・23年）、岡本忠文（医・23年）らが、三高東側の一室に本部を置き、社会思想の研究をおこなう。岩田によると、新人会員坂元彦太郎、浅利和吉、是枝恭二らが帰郷の途中、岩田の友人仙波の下宿に立ちより、京大でも社会科学の研究会を組織してはどうかと勧めた⁽³⁶⁾。伍民会の会員は当初10名ほどだったが、掲示板上で研究希望者を募集するとさらに約20名が集まった。このころ、藤井米三（経・22年、山口高等学校）、大橋積（経・23年、松山高等学校）、淡徳三郎（文・22年、三高）らも参加した。彼らは9月から11月にかけて「マニフェスト」の研究をする。

同年12月、伍民会は臨時総会を開き、会名を京都帝国大学社会科学研究会（以下京大社研）に改称した。社会主義者の会合を想起させる会名をあらため、一般学生に門戸を広げることが考えられた⁽³⁷⁾。総務部・研究部・図書部・会計部を設けるなど、一新した組織で研究活動がおこなわれた。また、新人会から学生連合会への加入を勧誘された京大社研は、この臨時総会で加入を決議する。1924年4月には河合悦三（経・23年）、山崎雄次（法・23年、一高）、石田英一郎（経・24年、一高）、橋本省三（法・24年、五高）、鈴木安蔵（文から経に転部、24年、二高）、熊谷孝雄（経・24年、一高）らが新しく京大社研に入会した。

京大社研が誕生したころ、東大新人会はすでに結成から5年たち、研究よりも実践に向けた体制が構築されようとしていた⁽³⁸⁾。新人会員菊川の回想では、1923年秋に新人会員内で幹部派（伊藤好道、後藤寿夫、志賀義雄、中野尚夫、村尾薩男ら）と非幹部派（大宅壮一、杉野忠夫、服部之總）らの対立が激化していたという。対立のきっかけは「幹部派の間に於て、共産党事件以後、新人会を

解体して、中心分子のみの秘密結社とせんとする画策あることが一般会員の間に知られ」⁽³⁹⁾ たことであつた。しかし、同年11月総会で激論のすえ、新人会の民主的中央集権制の確立、「大衆侮蔑の運動」から「学生大衆獲得」へ⁽⁴⁰⁾、会内の「機能班」の設置、先輩との連絡確立などの原則が樹立され、会内一致することになった。この機能班は9班にわけられ、「一、校内臨時寄宿寮、二、大学セツツルメント、三、校内消費組合運動、四、帝国大学新聞、五、学友会弁論部、六、社会科学研究会、七、各地高等学校内社会思想研究会との連絡、八、会費全体の研究事務に就いて、九、会報発行、発送の事務」を担当する⁽⁴¹⁾。

一方、京大社研が新人会のような班組織を採用するのは1924年4月頃からである。同月、北白川の山崎雄次方に本部が、京大の周辺に北白川班、田中班、下鴨班、寄宿舎班が設置された(同年9月岡崎班設置)。各班であつかうテキストは、順にレーニン『国家と革命』、マルクス『賃金・価格・利潤』、エンゲルス『空想より科学へ』、マルクス、エンゲルス『共産党宣言』である(岡崎班はテキストによらずさまざまな題目で研究)⁽⁴²⁾。

京大社研でも対外的な活動が徐々にではあるが始まっている。同年5月に、京大学生集会所で同志社講師河野密、弁護士水谷長三郎、同大・京大講師山本宣治を招いて公開講演会をおこなつた。河野は「マルクスとラッサール」、水谷は「小作運動の理論的基礎」、山本は「性欲と社会問題」について講演し、300名の聴衆を集めた⁽⁴³⁾。

また、7月には、大阪市電争議で起きた大阪高商学生義勇団の罷業破りに対して、京大社研の淡徳三郎が「阿波津三津夫」を名乗り、学連代表として大阪高商校長に公開状を手交し抗議した。校長への交渉には新人会の志賀義雄もくわわり、事後報告で「京大のD君」について「僕達はあの四面楚歌のとき実に最初の反対の声をあげて敢然大阪に行つたD君の勇気を尊敬する」と賛辞を送つ

た⁽⁴⁴⁾。

しかし、同時期には、新人会メンバーのうち後藤寿夫、是枝恭二、志賀義雄は、共産党解党後のビューロー機関誌『マルクス主義』(1924年5月創刊)に執筆し、後藤は同年末から編集に携わるように、やはりその活動を京大社研と同列に置くことはできない⁽⁴⁵⁾。こうした差は、京大社研のメンバーも感じていたようで、同年5月14日に新人会・京大社研両会員で九州巡回講演旅行をおこなつたさい、新人会の大塚虎雄は次のような感想を漏らしている。「京大の研究会の人達が不思議にも、新人会と云ふものから勘からぬ威圧を受けてゐるらしいことを感じて驚かされた。(少なくとも、僕にはさう感じられた。)/「京大と違つて新人会は資金を沢山持つて居るから何でも自由に活躍出来る」。「新人会には学者や名士が多いから抑へられて困る。」かうした言葉を彼等の口から聞かされる時、可成り不愉快を感じざるを得なかつた。」⁽⁴⁶⁾

2-3 学連第1回大会

1924年9月14日、東京帝国大学に全国から約50名が集まり、学生連合会の懇談会(事実上の第1回大会)が開催されることになった⁽⁴⁷⁾。この大会で、学生連合会は学生社会科学連合会(以下学連)に改称した。また、学連所属の研究会を関東、関西、東北にわけ、相互に連絡をとるため、関東連合会から5名、関西連合会から3名、東北連合会から2名の中央委員を選出した。この大会は関東連合会から後藤寿夫、是枝恭二、村尾薩男、菊川忠雄(以上東大新人会)、野呂栄太郎(慶應義塾)、清水平九郎、田畑太郎(以上明治学院)ら、関西連合会から池田隆、仙波直心、山崎雄次(以上京大)、沢田政雄(同志社)、酒井一雄(関西学院)らが参加している。

この関東、関西、東北、それに九州もくわえた学連内の勢力図だが、関東連合会の清水平九郎に

よって、関東、関西、東北各連合会、九州協議会の会員数が供述されており（表参照、ただし1925年末時点）、関東連合会の勢力が圧倒的に多いことがわかる⁽⁴⁸⁾。

当日、大会に参加した後藤寿夫に映った大会の重要な点は、「研究会の二元的性質」（中心の小グループと一般の会員）の克服であった⁽⁴⁹⁾。しかし、東京外の学連会員にとって重要だったのは、この大会で「地方連合会設置の件」が定められたこと

である。この点をとくに評価したのが関西連合会である。「従来学生連合会の実質は東京の各学校研究会であり、従て名は全国学生連合会と称せしもその方針は東京を中心として決定せられて居た。此れは或る過渡期に於ては避け難き事であるが、今や京坂神地方の各研究会数に於て質に於て東京より独立して、其れ自身の発展段階に最も適応した方針と戦術とをもつべき時機に到達した」⁽⁵⁰⁾と述べ、学連の多極化を歓迎する。

学生社会科学連合会会員数

大 学 別							
関東連合会		関西連合会		東北連合会		九州協議会	
東京帝国大学	100	京都帝国大学	120	小樽高等商業学校	45	九州帝国大学	50
早稲田大学	90	同志社大学	40	福島高等商業学校	25	大分高等商業学校	15
早稲田高等学院	80	立命館大学	20	東北帝国大学	20	山口高等商業学校	15
明治大学	60	京都府立医科大予科	20	東北学院	15	西南学院	20
明治学院	30	関西学院大学	20	北海道帝国大学	10	鹿児島高等農林学校	
日本大学	45	神戸高等商業学校	10	仙台高等工業学校	5		
慶應義塾	40	大阪外国語大学	10				
青山学院	30	京都高等工芸学校	10				
東京帝国大学農科大学	25	三重高等蚕糸学校	10				
中央大学	20	岐阜高等農林学校	10				
法政大学	20	鳥取高等農林学校	10				
東京外国語学校	15	関西大学	10				
宗教大学	15	京都高等蚕糸学校	5				
東京農業大学	15						
東京商科大学	10						
合 計	595	合 計	295	合 計	120	合 計	100

高等学校別							
関東連合会		関西連合会		東北連合会		九州協議会	
第一高等学校		第三高等学校		第二高等学校		福岡高等学校	
静岡高等学校		第四高等学校		山形高等学校		第五高等学校	
新潟高等学校		大阪高等学校		弘前高等学校		第七高等学校	
水戸高等学校		姫路高等学校					
		甲南高等学校					
		第六高等学校					
		広島高等学校					
		松江高等学校					
		松山高等学校					
		第八高等学校					
		合 計	450				

注) 清水平九郎の供述（「清水平九郎第四回訊問調書」『記録17』）から作成。単位は人でいずれも概数。

1925年末の情勢であり、各連合会、協議会総数について清水はそれぞれ600、300、120、100名と述べている。

この大会直後、最大勢力の関東連合会は、在京15校で代表委員会を開催した。中央委員の選出と活動部の設定が議論され、各校1名を選出して代表委員会を組織し、この代表委員会を関東連合会の執行機関とした。また、代表委員から中央委員(5名)を選出し、門屋博(東大)、戸叶武(早大)、陶山俊介(立教)、田畑太郎(明治学院)、衣谷賀真(慶應義塾)が就任した。活動部は組織部、教育部、調査部、図書部、会報出版部、会計部からなる。

さらに翌月22日、関東学連会は東大学生控所で第1回総会を開いた。ここで、会費徴収、会則制定、事業部設置など事務的な話にくわえ、社研未設校への拡張運動、学連の合同的地域的研究会設置の件などを可決し、農村青年教育運動や労働教育に対する態度に関する議論をおこなった。

一方、関西連合会が会合をもったのは9月22日である。この日は、関西学院社会科学研究会の発会式でもあった⁽⁵¹⁾。ここに京大、大阪外語、関西学院、甲南高等学校の有志が集まり、関西連合会設立にあたって、下記の取り決めをおこなった。

一、学生社会科学連合会規約に依て関西連合会を設立すること。／二、関西連合会の地域は当分の間、名古屋以西(北陸を除く)四国九州とす。但し近き将来に於て九州は独立して地方連合会を設立すべきこと。／三、関西地方より選出すべき中央委員三名は、関西地方学生運動の現^マに鑑みて京都大坂神戸に各一名を置く。／四、関西連合会の通信連絡其他雑費として各研究会中心の人々より毎月一人五銭宛本部に納める。／五、活動機関の組織。中央委員―連絡部 研究部 組織部 社会部 会計部―各学校研究会の中心の人々。

これを見るかぎりでは関東連合会の組織に劣らぬ内容が記されているが、この一方で、関西(京阪神)の「特異なる点」として次の点があげられているのは興味深い。それは、関西の研究会の大

部分は数人で成りたっていること、学校当局が無理解であること、電車など交通網が発達していないこと、書物が十分に供給されないこと、最後に「研究の指導となり又学生運動をバックしてくれる先輩又は教授の数の少きこと。」である。

この関西連合会の中心にあった京大社研も、2日後の9月24日に大会を開催し、各部の報告後、役員の改選をおこなった⁽⁵²⁾。これまでの総務部・研究部・図書部・会計部から、会計部がなくなり、新たに学連部、出版部、会友部が設けられた(総務部が会計事務を担当)。また、京大社研の機関として大会(5月上旬、9月下旬年2回開催)、委員会、各部委(定期大会ごとに改選、ただし再選可)が置かれた⁽⁵³⁾。

この前後、京大社研は、対外的に積極的な動きを見せている。他団体との交流としては、9月22日に社会思想社同人と、10月23日に新人会員と会合した⁽⁵⁴⁾。社会思想社は新人会OBによって設立された社会科学研団体で、山名義鶴や平貞蔵など三高出身者が所属していた。これ以外には、10月13日には河野密、水谷長三郎、小田美奇穂を講師に招き、京都社会問題講演会を開催、16日には細迫兼光、小岩井浄、坂本勝、山本宣治を講師として大阪社会問題講演会を⁽⁵⁵⁾、25日から30日まで山本宣治を講師に「性学五講」講演会(5回予定、山口仏教会館)を開催している⁽⁵⁶⁾。一方で労働者との交流も見られ、11月4日には大阪にある大原社会問題研究所の見学後、日本労働総同盟大阪連合会を訪ねて、幹部の野田律太、鍋山貞親、三田村四郎らと会談した⁽⁵⁷⁾。

上記のなかで、水谷や山本が京大社研の「研究の指導となり又学生運動をバックしてくれる先輩又は教授」になるが、それ以外にも元労学会員の小林輝次、会報の印刷を援助していた総同盟政治部顧問の山名義鶴⁽⁵⁸⁾、また逸することができないのが京大経済学部教授河上肇である。河上について、京大社研は「座談会〔1924年〕十月廿四日

河上博士を招いて之を開いた。出席者五十名位、この会によつて我々は研究会の実情を先生に知つて戴くことが出来たことを喜ぶ。尚今後も研究上の便宜を与へられんことを切望する。」⁽⁵⁹⁾と述べており、のちに河上から京大社研に多額の活動資金が贈られている(3章で後述)。

11月7日(ロシア革命記念日)になって、学連の学生たちは関東と関西で気焰をあげた。この日は学生連合会発会二周年にもあたり、双方の記念日を祝う講演会が東京の芝協調会館で開催された⁽⁶⁰⁾。講師と演題は、鈴木茂三郎「労農ロシアの実状」、大山郁夫「学生社会科学運動新展開」、戸叶武「学生社会科学連合会の過去及び現在」、高橋亀吉「現代の失業問題」、守田有秋「独逸革命とハーゼ」である。また、京都でもロシア革命批判公開演説会を開催し、同月7日の講演者と演題は住谷悦治「ロシア革命と其の教訓」、細迫兼光「ロシア革命と智識階級」が、18日は藤森成吉「芸術と革命」、山本宣治「最近の優生学」であった。7日は150名、18日は200名が来聴した⁽⁶¹⁾。

この前後から学連の活動は、軍事教育反対運動と高等学校社研解散反対運動を中心に展開されていく。9月、学連は「排戦デーの意義に徹底せよ青年学生軍事教育反対」のビラを作成して、「軍国主義の学園への侵略」を批判していた⁽⁶²⁾。こうした動きが結集して、11月12日には、東大の第二学生控所で都下大学・専門学校の有志が協議会を開催して、全国学生軍事教育反対同盟を旗揚げした。彼らは、軍事教育が教育の独立性を脅かし、国民文化の発展を阻害するためなどの理由で「学生軍事教育に絶対に反対す」との決議をおこなった⁽⁶³⁾。また、同月22日には、同盟実行委員が文部省と陸軍省を歴訪し、決議文を突きつけて反省をうながした⁽⁶⁴⁾。

1924年11月には、全国高等学校長会議で社研解散方針が決定し、12月3日には五高社研が解散を命ぜられた⁽⁶⁵⁾。京大社研は12月10日前後、高

等学校社研解散問題などに関する「報告」を発表し、研究会存続を目的とした運動方法と存続が不可能な場合の2つにわけて対策を提示し、前者では「中心分子の緊密な結合」「一般会員の結合」、校内講演会開催などをかかげた⁽⁶⁶⁾。同月中旬になると、運動のすそ野が広がり、15日には、抗議する新人会、早大、慶應、明大の各社研代表者が岡田良平文相に面会を求めて文部省に押しかけ、京大でも17日、学生集会所で河上肇、神戸正雄、河田嗣郎、佐々木惣一、小西重直らの各教官が出席し、軍教批判演説会を開いた。なお、山本宣治も講師に招き批判講演会を開こうとしたが、これは当局の意向で実現しなかった。

次章では、共産党解散後、ビューローがどのように青年運動を立ちあげようとしたか、またビューローの左傾化活動が労働運動、無産政党樹立運動へとおよぶなかで、新人会や京大社研といった学生運動がどのような影響を受けていったのかを見ていきたい。

3 「方向転換」から「現実化」へ

3-1 党再建とビューロー

「大衆的運動」への方針転換をめざした日本共産党だったが、その後の活動も軌道に乗らないまま、1924年2月か3月頃の森ヶ崎会議で解党を決議する。その後、残務整理のために、青野季吉、荒畑寒村、佐野文夫、徳田球一、野坂参三、北原龍雄をメンバーとするビューローが設けられた。しかし、解党を受け入れることができないコミンテルンは、コミンテルン第5回大会(1924年6～7月開催)で日本代表片山潜と日本から参加した佐野学、徳田球一、近藤栄蔵に党再建を指示した。1925年1月下旬、コミンテルン極東部長ヴォイチンスキー、亡命中の佐野学、ビューロー員の青野季吉、荒畑寒村、佐野文夫、徳田球一が上海で党再建に向けた会議を開く。この会議で決議された「上海会議一月テーゼ」⁽⁶⁷⁾は解党の原因分析、党再

建に向けたビューローの組織について記し、「大衆の間に不拔の階級精神を発達させつゝ日本に於ける自発的革命運動に対して、専制主義に対する意識的闘争たる性質を付与することが絶対に必要」と主張した。また、7月会議の開催を決議し、代議員として「一切の共産主義団体、細胞の中から、並に工場、労働組合、小作人組合、学生連盟等に働いてゐる個人、共産主義者の中から」招集すべきことを述べた。

党再建実現へ向け、ビューロー・メンバーは2月頃帰国する。しかし、上海テーゼへの態度や党再建への足並みはそろわず、すぐに再建に向けた動きにはいたっていない。また、コミンテルンから日本に向けて記されたと思われる書簡(同年4月22日付)には「私たちの会議〔上海会議〕以降いかなる連絡も受け取ってこなかった。」⁽⁶⁸⁾と記されているように、コミンテルンとの意思疎通もうまくいっていなかった。

これが解消しはじめるのは、同年5月頃と思われる。同年2月頃より徳田宅に寄寓していた北浦千太郎がビューローの報告を上海の佐野に届け、佐野がこの報告をモスクワに送った頃からと考えられる⁽⁶⁹⁾。しかし、国内事情を見れば、必ずしも党再建が順調だったわけではない。「B〔ビューロー〕の事務報告」(同年3月31日、「Mizutani Ota Narita Aoki」〔徳田球一、辻井民之助、佐野文夫、荒畑寒村か〕の署名)⁽⁷⁰⁾には、旧日本共産党の長老格堺利彦と理論的指導者山川均の態度について次のように記されているからである。

上海会議に於けるテーゼを実行する為めに、Bは先づ之を堺、山川、両同志に示し、その意見を聞くことにした。然るに両同志は残念ながら之に反対した。その反対の要旨は、／(堺)はテーゼの精神には賛成だが、若しこのテーゼに基いてやるならば、運動は著しく露骨になり、非常な危険に曝れるゝので、多くのよい同志を失はねばならぬ。故に、この

テーゼを即刻に実行することは反対だと云つてゐる。／(山川)はこのテーゼは共産主義の定石ではあるが、日本の情勢を全然閑却したものであるからこれに対しては、かなり根本的な意見の相違がある、然らば、日本の情勢に適應する如何なる運動形態があるかに対しては彼自身今示すことは出来ないと云つてゐる。故にこのテーゼに基く実行に対しては個人的には援助もするが自ら進んで参加することを欲しないと拒否した。

この2人からの積極的な支持を欠いたため、党再建に関しては厳しい船出を強いられることとなった。しかし、4月5～7日にわたり、ビューロー・メンバーは拡大ビューロー会議を開いた⁽⁷¹⁾。会議の報告書によると、出席者は「成田、太田、水谷、青木」(順に佐野文夫、辻井民之助、徳田球一、荒畑寒村か)の旧ビューロー員と渡辺政之輔、花岡潔、間庭末吉である。会議は青木が議長となり、まず青木、太田、水谷から解党後今日にいたるまでの状況説明があり、青木による上海テーゼの逐条解説と参加者間の議論をへて、「メムバアは悉く此のテーゼに賛成し」、ここに正式に「新J.C.B」が成立した。その体制は、組織部に水谷(徳田)、青木(荒畑)、花岡、渡辺、白井(間庭)、宣伝部に太田(辻井)、青木、渡辺(政之輔)、情報部に成田(佐野文夫)、太田、花岡(潔)、事務部に青木、水谷、白井が就任している。また、5月中旬か下旬に会議を開く予定とも記されており、そこに招待するメンバーとして、ビューロー員以外で鍋山(貞親)、岸野(重春)、高橋(貞樹)、北浦(千太郎)、田所(輝明)、浅沼(稻次郎)、野坂参三、西雅雄、杉浦啓一、田部、青垣、花田(佐野学か、同時期は在滬)があげられているのは興味深い。

ビューローの体制が整備されるなか、すでに労働運動を中心にビューローによる左傾化活動は進んでいた。その対象となったのは総同盟である。

1925年3月15日から17日まで神戸基督教青年会館で総同盟全国大会が開かれた。同大会をきっかけに総同盟は中央と左派に分裂し、翌18日には総同盟中央から左派指導者（中村義明、鍋山貞親、山本懸蔵、渡辺政之輔、杉浦啓一、辻井民之助）に除名計画が告げられた。なかでも、辻井が入っているのが注目される⁽⁷²⁾。第一次共産党事件直前にソ連に亡命していた辻井は、1924年8月頃に帰国、1か月東京で収監されたのち、京都に戻ってきていた⁽⁷³⁾。辻井を迎えた谷口善太郎、国領、奥村甚之助、桂信三ら総同盟京都連合会幹部も左派にくみしており、1925年5月24日、左派が集結して日本労働組合評議会が結成されると、彼らは大挙して参加する。

こうしたビューローからの働きかけは、同時期における無産政党結成準備にも影響をあたえた。総同盟左派が山川均の単一無産政党論（共同戦線党論）によりながら全国的単一無産政党の結成を押しすすめる一方で、総同盟中央は地方から中央への動きを重視し、足尾、京都、九州、千葉などに地方無産政党を結成させていく。

本稿との関係では、この時期、青年運動が党再建に向けて、どのように位置づけられたかである。徳田球一が第2次日本共産青年同盟結成に向けた準備について供述している。それによると、解党後、徳田は渡辺政之輔、片山久、金子健太、北浦千太郎、また全国水平社青年同盟の高橋貞樹、岸野重春らに声をかけ、共産青年同盟の復興を計画していたおりに、「コンミュニストグループが大正十四〔1925〕年八月に確立されましたので茲に青年部を設け、北浦千太郎が其主任となつて、一方無産青年同盟の公然運動を為すと共に、非合法的に所謂「ユース」の建設を為し、之に依つて無産青年同盟を共産主義グループの勢力の下に置く事に努力致しました。」⁽⁷⁴⁾

しかし、「Bの事務報告」（3月）では、ユース結成準備についてこれとは異なる次の記述があ

る。「次に、青年Bのことであるが、これに付いては既に人選を終へ夫々交渉する手筈になつてゐるが、第一活動する資金は全く欠乏し、前述のような事件は輻輳してゐるので先づBの内部の整理を終へてからだと思つてゐる。／人選はB・Mから山口、水谷、水平社から水平青年同盟の高橋、岸野、農民組合から浅沼、建設者同盟から田所、労働組合から鍋山、片山である。」山口は山口氏門こと佐野文夫、水谷は徳田球一、高橋は高橋貞樹、岸野は岸野重春、浅沼は浅沼稻次郎、田所は田所輝明、鍋山は鍋山貞親、片山は片山久〔本名峰登〕であろう。すでに3月の時点で党内に青年ビューローが作られ、これが核となってユース結成に動いたことがわかる。

また、「Bビジネス報告」（4月18日、「Ozawa Mori」〔荒畑寒村、徳田球一か〕の署名）には、この「青年B」の構成が以下のように詳述された。「青年部は、Bより花田、水谷の二名が入り、労働者側より大阪の鍋山（全国労働組合選出の総同盟関西同盟会執行委員）、東京の片山（東京合同労働組合員）及び北浦（印刷連合会員）、農民組合より浅沼（中央委員）、稲村（農民新聞主筆）、学生運動側より田所（「青年運動」主筆）。水平社より大阪の岸野、高橋（共に「選民」の発行者）を以て構成することに決定し、目下その選定者を勧誘説得に力めつゝあるが、資金欠乏の為に甚だしき困難を感じてゐる。」この報告から、徳田の供述にはない、より多様な人物によって青年部の結成がすすめられていたことがわかる。

3-2 学生運動における左傾化の影響

1925年春になり、労働運動や無産政党組織準備運動で左右対立が起きはじめるなか、学生運動にも影響がおよびはじめる。

京大社研は、同年4月新しい会員を迎え、組織も変更した。このころ、栗原佑（経・25年、二高）、大田遼一郎（経・25年、八高）、泉隆（経・

25年、四高)、白谷忠三(経・25年、八高)、古賀二男(法・25年、五高)、武藤丸楠(工・25年、二高)らの新入生が京大社研に加入したことで、会員は約140名になった。

京大社研は、従来の班(地域別構成)にくわえ、テーマ別の班を新設した。資本論研究班、農村問題研究班、金融問題研究班、時事問題研究班、普通研究班である。資本論研究班は、京大学生集会所で河上肇からマルクス『資本論』の講義、金融問題研究班は北白川本部で谷口吉彦⁽⁷⁵⁾経済学部講師から高橋亀吉『金融の基礎知識』の講義、農村問題研究班は杉野忠夫宅で、杉野の指導のもと農村問題研究、時事問題研究班は京大寄宿舍で時事問題を研究発表、討論した。いずれの研究会も週1回のペースで開催された⁽⁷⁶⁾。

なお、同年4月頃、河上肇から京大社研に多額の活動資金が送られた。京大社研の活動資金は会費だけでは不足していたため、会員の逸見重雄、小林直衛、吉川孟文が河上を研究室にたずねた。逸見は研究会の窮状と活動費用の必要性を訴えたところ、河上は研究のためならばと俸給袋から100円を渡した。また、マルクス著河上訳『賃労働と資本 賃賃、価格及び利潤』(弘文堂書房、1921年)の印税(重版につき33円)も京大社研に贈られることになった⁽⁷⁷⁾。この資金によって、後述のプロカル活動に必要な旅費をまかなう。

京大社研は、研究班で教官との関係を深める一方で、先輩との交流会も欠かしていない。1925年1月8日に、京大社研は、日本フェビアン協会の関西地方講演会にあわせて、元労学会員である小林輝次と水谷長三郎と会合をもった。このとき小林からは「東京に於ける社会運動殊にフェビアンの運動」、水谷からは「労学会の歴史」について詳細な説明があったとされる⁽⁷⁸⁾。

この時期の京大社研の活動として、注目されるのが政治研究会との関係である。政治研究会は、無産政党組織準備のため、1924年6月に創立され

た。創立委員に選ばれたのは、安部磯雄、大山郁夫、高橋亀吉、賀川豊彦、三輪寿杜、鈴木茂三郎、青野季吉、島中雄三らである。会の活動は、大衆の政治的教育、治安維持法反対などの政治運動、無産政党に関する調査研究、無産政党組織促進運動、労働組合、農民組合の組織化であった⁽⁷⁹⁾。労働運動にも無産政党結成準備への動きがあったことは既述の通りだが、政治研究会とは必ずしも無産政党結成に向けた歩調はあっていない。しかし、ここにビューローの左傾化活動の影響がおよぶことで、その方向が変わってくる⁽⁸⁰⁾。こうした動きが表面化してくるのは政治研究会第2回全国大会後(1925年4月)からである。

1925年春までに、政治研究会は関西地方にひとつの支部も持てないでいたが、京都が最初の支部設置候補にあげられた。1925年1月、政治研究会は「関西大遊説計画」を立ちあげて、このための地ならしをおこなうことになった。講演は、同月13日午後6時から大阪中之島公会堂で、講師は大山郁夫、高橋亀吉、爲藤五郎、佐野袈裟美、三輪寿杜、島中雄三である⁽⁸¹⁾。

京大社研は、この講演がおこなわれたのと同じ日、高橋亀吉を招いて懇談している⁽⁸²⁾。また、同月15日の講演会では、京大社研メンバーが「深く敬慕してゐた」大山郁夫を招いた。大山は「社会思想の現実化傾向」の題で「労働運動と学生社会科学運動との現実化傾向を述べ、更に転じて最近問題の各高校社会科学研究会解散問題、軍事教育問題につき、文部当局の暴挙を完膚なき迄にやつけた」という。この講演には、聴衆300余名が押しよせ、そのあと集会所南室で開かれた大山を囲む座談会には50名が参加したという⁽⁸³⁾。

大山や高橋が学生の招きに応じたのは、まさに政治研究会京都支部設置の原動力に彼ら京大社研の学生たちが考えられたからにほかならない。支部結成の会合が開かれたのは、4月6日、京大学生集会所である。当日の司会者は杉野忠夫で、山

本宣治、辻井民之助、国領五一郎、森英吉、学生からは淡徳三郎、山崎雄次、藤井米三、石田英一郎、小林直衛、柴田平治（以上京大）、宮崎菊次（同志社）、鈴木東民、浅野晃（以上新人会）らが参加した。設立の趣旨、「支部設立に至る経過報告」の説明、活動方針の討議などがおこなわれたあと、支部代表者に山本が、委員に小林、宮崎が選ばれた。

彼らは同月16日にふたたび大山郁夫を迎えて政治研究会公開講演会を開いたほか⁽⁸⁴⁾、5月5日には京都支部事務所で春期総会を開いた。ここでは、全国大会の報告、支部規約改正、役員選挙などが話しあわれ、なかでも「関西地方最初の支部として関西地方一般に対する組織事業の件に就ては会員の熱心な討論があつた」⁽⁸⁵⁾という。

しかし、左傾化しつつある政治研究会の支部が京都で結成されたこと、しかも、そこに京大社研らの学生が参加していたことをもって、京都の学生運動にビューローの左傾化活動が浸透していたとはいえない。なぜなら、第一に、京都の労働運動ですら、左派の牙城京都地方評議会が結成されるのは日本労働組合評議会結成の1か月後（1925年6月20日）であり、第二に無産政党結成問題についても関心が高まるのは同年8月以降であるからである。

これに対して、ややちがった動きを見せたのが学連関東連合会である。同年5月2日に明治学院で第5回関東連合会総会が開催され、9校から30名が参加した⁽⁸⁶⁾。各部と各校研究会からの報告をへて、以下の議案（「学生社会科学連合会の根本方針確立の件」「学連の財政的基礎確立の件」「全国総会を京都に開催するの件」「学連の本部変更の件」「会報発行の件」「マルクス誕生記念講演会開催の件」「関東連合会組織変更の件」）が話しあわれた。このなかで重要なのは、第2回全国大会の地に京都が選ばれたこと、関東連合会の組織が改正されたことである。後者の組織改正は重要案

件であったため、最後に審議されている。

総会が最高の決議機関であることはこれまで通りであるものの、加盟団体から一名ずつ選出して組織した代表委員会を総会から総会までの決議機関とすること、「代表委員会の選任せる五名の常任委員を以つて常任委員会を組織し、これを以つて会務の一切を処理統括すべき最高の執行機関とする。常任委員中三名を各活動部の主任二名を庶務とする。」が主な組織改正点である⁽⁸⁷⁾。「特に執行機関について言はなければならないことは、執行機関こそ会の頭脳であり心臓であつて、会の盛衰、活動の活発不活発は一つにこの頭脳の健全と心臓の活動とにかゝる。」⁽⁸⁸⁾とも記され、常任委員会の新設による意思決定の迅速化と活動部の円滑な管理運営が目的であった。そして、この関東連合会の組織変更は学連とその所属団体への先導としておこなわれていた。

5月6日に、学連はマルクス誕生記念学術講演会を芝協調会館で開催している⁽⁸⁹⁾。当日は、門屋博「開会の辞」にはじまり、斎藤健一「マルクスの紀年祭に際して」、山本懸蔵「一労働者の見たるマルクス」、浅沼稻次郎「マルクスと農民問題」、スレバック「マルキシズムに就て」、西雅雄「マルクスを学ぶ一人として」、猪俣津南雄「マルクスに就ての一所感」、最後に田畠太郎「閉会の辞」のプログラムであった。800余名の聴衆がいたという。興味深いのは、講師の人選であり、山本、浅沼、西、猪俣いずれも元日本共産党員か、ビューローの関係者であった。

また、同年5月か6月頃、福本和夫の上京にさいして、新人会が彼の論文に関する質問討論会を東大学生集会所で開催したとされる⁽⁹⁰⁾。彼の論説が共産主義運動に強く影響をあたえていくのは1926年のことだが、すでに福本はマルクス主義に関する論文を『マルクス主義』で精力的に発表し、河上肇批判も展開するなど、関東の一部の学生にも影響がおよびはじめていた。

3-3 無産階級運動の一翼として

——学連第2回大会

こうしたなか、学連第2回大会開催の準備が進む。京都で開催されることは決まっていたが、大会準備を実質的に主導したのは学連関東連合会であった。このころの同会主要メンバーは、是枝恭二、村尾薩男、後藤寿夫、小倉司郎、松本篤一（以上新人会）、秋笹政之輔（早稲田高等学院）、井上道人、長島又男（以上早稲田）、田畑太郎、清水平九郎（以上明治学院）、実川清之（日本大学）、野呂栄太郎、衣谷賀真（以上慶應義塾）らである。

1925年5月30日、関東連合会は、新人会本部で常任委員会を開催し、大会日時案（7月15、6日）と準備委員会設立を話しあい、準備委員には井上、秋笹、衣谷、彦田亀一、田口右源太を推薦した⁽⁹¹⁾。6月4日にマクドナルド教会で開かれた関東連合会代表委員会で、常任委員会の議決が審議・可決され、準備委員の顔触れも承認された⁽⁹²⁾。同月18日頃同所で開催された代表委員会では、学連方針確立に関するテーゼ作成、規約改正、教程作成などが話し合われ、全国大会に提出する大会テーゼの起草委員に村尾が、規約草案委員に野呂が選ばれた⁽⁹³⁾。

しかし、同月25日同所で開催された代表委員会で、村尾の大会テーゼ案は却下され、新たに後藤、清水、衣谷がテーゼ起草委員に、野呂、衣谷、彦田が改正規約草案起草委員に選ばれた。この日は、関東連合会教育部長の清水から全国的教程案が提出された⁽⁹⁴⁾。同月27日、起草委員の後藤、清水、衣谷は新人会本部に集まり、清水が規約案のうち教育に関する事項を、衣谷が当面の問題に関する事項を、後藤がそのほかの点を担当した⁽⁹⁵⁾。同日夜、三田北寺町の野呂の下宿に衣谷、彦田が来て規約草案にもとづきこれを修正し作成した⁽⁹⁶⁾。7日に開かれた大会前の最後の代表委員会で、これら大会テーゼ案、改正規約案と全国的教程を審

議し可決する⁽⁹⁷⁾。

大会直前になって、関東連合会の会員も大会開催の地京都へ向かう。清水、村尾らは同月11、2日頃、是枝はその翌日に東京を発ち、京大社研北白川本部へ向かった。その後関東から京都に2、30名が向かう。もっとも、清水らが京都に着いたときには大会テーゼ関西案は未完成で、京大社研の山崎雄次が執筆中であった⁽⁹⁸⁾。

15日朝、ようやく大会テーゼ関西案が完成し、午後から北白川本部で会合が開かれた。関東側、関西側が大会順序の記載されたプログラムにもとづいて審議し、議案整理をした。問題となったのが、大会で何を公開するかである。そもそも関西連合会側は、大会を非公開にするつもりだった。というのも、学連関西連合会には大会開催の経験がないうえ、公開すれば官憲の手前徹底的な討議ができないためである⁽⁹⁹⁾。しかし、関東連合会の清水、村尾らが大阪朝日新聞記者に学連第2回全国大会開催を告知して、宣伝を依頼していた⁽¹⁰⁰⁾。また、大会開催にさいして大学当局と折衝していた山崎雄次が学生監との会見内容を話し、露骨な内容を公表することは警戒すべきだと告げる⁽¹⁰¹⁾。このため、大会の提案中、高等学校研究会解散問題の件、軍事教育反対に関する件は、京大当局や臨監の警官を警戒して事前に撤回した。

もうひとつは、大会テーゼ案をそのまま大会に出すか否かである。大会テーゼ案は関東案、関西案ともに露骨な内容を記載してあったため、大会中止解散を命ぜられるおそれがあった。それゆえ、同日夜、北白川本部で山崎雄次、村尾薩男、是枝恭二らが相談し、関東関西案と是枝が独自に作成した補足案を総合して大会テーゼ草案を作成することになった。しかし、山崎は会場借り入れて忙殺されていたため、折衷案は関東連合会側が主導して作成する⁽¹⁰²⁾。

大会は、16日午前10時から、京大学生集会所で開かれた⁽¹⁰³⁾。大会の冒頭、当局から下鴨署と川

端署の署員を1名ずつ臨席させる話があったが、実際は数十名の高等視察係が来ていた。京大当局からも学生監はじめ2名が出席した。学生側の出席者は、関東連合会より是枝恭二、村尾薩男（以上新人会）、清水平九郎、矢島直一（明治学院）、実川清之（日本大学）、野呂栄太郎（慶應義塾）、関西連合会より栗原佑、橋本省三、鈴木安蔵、山崎雄次、池田隆、古賀二男、武藤丸楠（以上京大）、内海洋一（同志社）、蓮台恒治（神戸高商）、酒井一雄（関西学院）、原田耕、黒川健三（以上大阪外語）、東北連合会より高橋八郎ら総勢5、60人であった。出席者にはプログラム、大会テーゼ草案、改正規約草案が配布された。

栗原が開会の辞を述べたあと、村尾と鈴木が議長、副議長に推されて議事が進行する。話し合われたのは、大会テーゼ、九州連合会独立の件、規約改正の件、全国的教程作成の件である。もっとも重要である大会テーゼ案は是枝が説明、とくに意見もなく字句を修正して可決、九州連合会独立の件は委員付託となる。規約改正の件は内容の一部を訂正し可決、全国的教程作成の件は委員付託となり、作成委員として清水平九郎、高橋八郎、石田英一郎が選出された。大会は、午後4、5時頃散会となった。

しかし、彼らにとって重要な会合はこの翌日開かれた⁽¹⁰⁴⁾。北白川の京大社研本部と聖護院の米谷方（淡徳三郎の下宿先）双方で会合を開いた彼らは、大会実施前に撤回した2提案（高等学校社会科学研究会解散問題の件、軍事教育反対に関する件）と、重要案件である大会テーゼ案と全国的教程を徹底的に審議した。本部に集まったのは、石田、是枝、清水平九郎、池田隆、橋本省三、内海洋一、古賀二男ら約10名である。

彼らはここで大会テーゼ案を徹底的に議論し、組織や、政治研究会その他無産団体への対策、全国的教程、講演会開催についても打ちあわせた。是枝が議長をつとめ、大会テーゼ案を再審議した。

是枝がテーゼ補足案、関東案、関西案を説明し、とくに反対意見はでなかった。全国的教程は前日の大会で委員付託になっていたが、これは当局に対する形式的なもので、この日は是枝が読みあげて、出席者が書きとり、その教程が確定した。

一方、聖護院の会合には関東側から村尾ほか4、5名、京都側から山崎、黒田、沢田らが参加した。山崎を座長として、各学校社会科学研究会の情勢報告、各学校における軍事教育の状況報告、産業労働調査所の報告などがあった。

この大会で可決された大会テーゼは、『学生社会科学連合会会報』3号（1925年10月20日）で発表された⁽¹⁰⁵⁾。その内容をまとめると、近年におけるさまざまな学生運動の誕生を、資本主義発達過程（帝国主義時代における中間階級の没落）に位置付けながら、「無産階級と歩調を一にする学生運動」の優位性を説く。また、この運動を代表する学連の歴史を「発生期（一九二二—一九二三、九）」「方向転換期（一九二三、九—一九二四、九）」「現実化時代（一九二四、九—現時まで）」にわけて論じた。彼らが危機感をいだくのは「帝国主義日本の漸増的不安」「幾多の反動的攻勢の組織化」「中間階級の没落」（これらは「ファスシスチ的運動の到来」に結びつく）であり、これを防ぐため、学生運動において以下の「任務」を打ちだした。

イ、プロレタリア的社会観の体得。自らが、社会的使命を果さんが為に、明確なる理論を獲得せねばならぬ。これが為には、研究と同時に、社会現象の留意を怠らず、又可能な限りに於て、社会的事業及調査に従はねばならぬ。／蓋し、理論は、実践と共に固く統一される事に依つてのみ力たり得る。／ロ、プロレタリア社会科学の普及／1、徹底的にブルジョア的イデオロギーの批判を必要とする。2、社会科学研究会の拡張と緊密なる組織統一 3、無産階級への普及。

この学連第2回大会を学連の転機と供述する学

生は多い。帰省中で大会に出席できなかった京大社研の泉隆は、「私か夏休暇後京大研究会の委員会及其他の会合に出席して感じたことですか〔、〕会員一般の思想行動は休暇前に比し著しく変化し急進的となり〔、〕会員等は何れもマルキシズムレーニンズムを以て学生運動の指導精神となすべきことを感得するに至つた様子であつて〔、〕右大会テーゼの上程等が大いに与つて力あるものと考へたのであります」⁽¹⁰⁶⁾と述べ、また、日本大学の実川清之も「第二回大会当時における学連の運動方針は大会のテーゼにも表はれて居る如く第一は学連全般の思想をレーニンズムで統一すると云ふ事、第二は学生運動の意義を明確にし理論と実践との統一を主とし学生運動は無産階級運動の一翼であることを明にした点」⁽¹⁰⁷⁾であったと述べた。しかし、第2回全国大会をもって、学連全体が「レーニンズム」一色になったわけではない。

次章(下)では、ビューローの左傾化活動を背景に接近しつつあった労働運動、学生運動の動きをおさえながら、関東と関西における学生運動の位相について見ていきたい。

[註]

- (1) 本稿の引用では、原文のルビ等は省略したほか、引用者による註、改行はそれぞれ〔〕、「／」で表記した。旧字体は新漢字に直し、歴史的仮名遣いはそのまま表記した。引用文中におけるカタカナは読みやすさを考慮し、一部平仮名に改めた。引用中に今日の観点から見れば、一部差別的表現があるが、歴史的文献であるのでそのままとした。
- (2) 同時期日本の共産主義青年運動については、大串隆吉「日本共産青年同盟と共産主義青年インターナショナルについての一考察」(『人文学報 教育学』1983年3月31日、東京都立大学人文学部)、斎藤勇『日本共産主義青年運動史』(1980年8月、三一書房)を参照。
- (3) この時期の日本共産党については犬丸義一『第一次共産党史の研究 増補 日本共産党の創立』(1993年3月、青木書店)を参照。
- (4) 高瀬清『日本共産党創立史話』第二部Ⅲ、1978年6月、青木書店。
- (5) РГАСПИ, f.495/op.127/d.37/118-127. 同資料(マイクロフィルム)は同志社大学人文科学研究所に所蔵されているものを閲覧した。
- (6) 「飢えたるロシヤを救へ!!!」74頁『建設者』1922年12月1日、建設者同盟。『建設者』は法政大学大原社会問題研究所(以下大原社研)から復刻されたものを用いた。
- (7) 菊川忠雄『学生社会運動史』122頁、1947年6月、海口書店。
- (8) 同上同頁。
- (9) 前掲「日本青年運動の方針及び経過」。
- (10) 前掲『学生社会運動史』138、9頁。
- (11) 林房雄「学生社会科学運動の現状」4、5頁『新人』1924年10月1日、新人社。
- (12) 「池袋日誌抄」70頁『建設者』1923年1月1日、建設者同盟。学生連合会については「最近ニ於ケル社会思想団体ノ状況 大正十二年一月調」187頁(『続・現代史資料2 社会主義沿革2』1986年7月、みすず書房)も参照。
- (13) 前掲「日本青年運動の方針及び経過」。
- (14) 前掲『日本共産党創立史話』202頁。
- (15) РГАСПИ, 495/127/61/1-3. 加藤哲郎「第一次共産党のモスクワ報告書(上)」45頁『大原社会問題研究所雑誌』1999年8月、大原社研。
- (16) РГАСПИ, 495/127/58/7-12. 前掲「第一次共産党のモスクワ報告書(上)」47頁。
- (17) РГАСПИ, 495/127/60/40.
- (18) РГАСПИ, 495/127/61/81-98.
- (19) 労学会については水谷記「京大時代」、高山義三「労学会のころ」、伊藤祐之「労学会の思い出」、藤井崇治「大学のころ」(永末英一編『水谷長三郎伝』1964年5月、水谷長三郎伝刊行会)、「労学会のことなど——小林輝次氏にきく」(『運動史研究 10』1982年8月、三一書房)を参照。
- (20) 辻井民之助『労働運動四十年——付・社会党・総評批判』26、7頁、1962年8月、辻井民之助。

- (21) 渡部徹編『京都地方労働運動史（増補版）』191、2頁、京都地方労働運動史編纂会。森については故森英吉氏25周年忌記念会編『故森英吉氏の農民運動における軌跡』（1972年、故森英吉氏25周年忌記念会）を参照。森はのちに労働農民党京都滋賀支部長となる。
- (22) 『同志』2号とその後継誌『青年運動』3号は大原社研所蔵。
- (23) 前掲『京都地方労働運動史（増補版）』225頁。
- (24) 「改題に就いて」1頁『青年運動』1923年3月15日、青年運動発行所。
- (25) 山川均「全国の無産階級はブルジョアの逆襲に対して一斉に蹶起せよ——過激法案と労働組合法案と小作争議調停法案」2頁『青年運動』1923年3月15日、青年運動発行所。
- (26) 「青年運動の暁鐘」161～3頁『前衛』1922年10月1日、前衛社。
- (27) 前掲『京都地方労働運動史（増補版）』242頁。
- (28) 前掲「日本共産党と青年運動」。
- (29) 「無産者連盟の頭株を続々検束 盲人主義者も検束 之に屈せず檄文を撒布」『京都日出新聞』1923年5月18日付夕刊。
- (30) 「熱弁を揮ふ弁士悉く「中止」の重傷を負ひ混乱裡に解散を命ぜられ十五名五条署に検束 青年会館の無産者大会」『京都日出新聞』1923年5月18日付朝刊。
- (31) 黒川伊織「日本共産党ウラジオストク在外ビューローについての基礎的検討——第一次共産党事件以降の党活動の諸相」（『キリスト教社会問題研究』2008年2月20日、同志社大学人文科学研究所）を参照。
- (32) РГАСПИ, 495/127/58/56.
- (33) РГАСПИ, 495/127/69/64-76.
- (34) 前掲「学生社会科学運動の現状」6頁。
- (35) 「淡徳三郎聴取書 第二回」『京都学連事件記録 6』（以下記録）。
- (36) 「岩田義道第二回訊問調書」『記録 10』。
- (37) 「淡徳三郎第三回訊問調書」『記録 15』。逸見重雄による京大社研紹介は「京大社会科学研究会 其精神と事業」（『京都帝国大学新聞』1925年10月15日付）、「京大社会科学研究会 其精神と事業（続）」（『京都帝国大学新聞』1925年11月1日付）を参照。
- (38) 石堂清倫・豎山利忠編『東京帝大新人会の記録』（1976年6月、経済往来社）を参照。
- (39) 前掲『学生社会運動史』197頁。
- (40) 「新人会と先輩との連絡に就いて」『新人会会報』特別号。同雑誌は以下『菊川忠雄関係文書』所蔵であり、国会図書館憲政資料室で閲覧複写したものを利用した。なお、菊川文書には『京大事件記録要綱』があり、『京都学連事件記録』を抄録したものである。
- (41) 「新人会の現状に就いて」『新人会会報』特別号。
- (42) 「岩田義道第四回訊問調書」『記録 16』。
- (43) 「一九二四（大正十三）年書簡」216頁、山本宣治著・佐々木敏二・小田切明徳編『山本宣治全集』第7巻、1979年12月、汐文社。「京大にも生れた社会科学研究会 河上肇博士を中心として真剣に質実の研究を進める」『帝国大学新聞』1924年5月9日付。
- (44) 東大志賀義雄「大阪市電罷業と高商高工学生と学生連合会——委員の報告」38頁『新人』1924年8月1日、新人社。学生連合東京連合会「大阪市電罷業に際し学生諸君に訴ふ」が添付。「同盟罷業に対して学生は厳正中立たれ」と大阪高商工学生に戒告した東西学生連合会『帝国大学新聞』1924年7月11日付。「三教授の獅子吼 罷業破り問題で」『帝国大学新聞』1924年8月8日付。
- (45) 大原社研編『マルクス主義』別巻、27頁、2001年5月、法政大学出版局。
- (46) 大塚生「旅より帰りて」『新人会会報』1924年7月。京大社研からの同行は「河合」と「池田」とある。
- (47) 「三十余校の学生連合大会」『帝国大学新聞』1924年9月19日付。同記事には「顧問早大の大山〔郁夫〕教授を迎へ」とある。すでに東京の学生連合会は組織を確立しており、「近き将来、全国的にその緊密なる連合を完成した我々の会が、組織ある統一の下に、労働者及び農民教育運動に参加する姿を暗示する」（『学生連合会報告（後藤寿夫）』

- 『新人会会報』1924年7月)とまで述べ、東京在住のメンバーが中心になって準備したと考えられる。
- (48)「清水平九郎第四回訪問調書」『記録17』。
- (49)前掲「学生社会科学運動の現状」7頁。
- (50)「関西連合会申合」2頁『社会科学連合会会報』1924年11月25日、社会科学連合会。発行所は東京帝大で、発行人は門屋博(新人会員)である。同雑誌は大原社研所蔵で同号のみ確認。
- (51)前掲「関西連合会申合」2頁。関西連合会は、これ以前の同月16日、大阪西区の九条市民館で、岩崎卯一、河野密、山本宣治、水谷長三郎、細迫兼光、松沢兼人、小岩井浄を講師に迎えて「学生反動思想批判講演会」を主催している(「学生反動思想批判講演会」大原社研所蔵)。
- (52)「総務部報告」10頁『会報』1924年12月10日、京都帝国大学社会科学研究会。同雑誌は大原社研所蔵の2～4号のみ確認。
- (53)「会則」9頁『会報』1924年12月10日、京都帝国大学社会科学研究会。「会則改正草案」が山本宣治資料館に所蔵されている。同資料の閲覧は小田切明徳氏のご厚意による。総務部委員は逸見、小林、研究部委員は熊田、藤井、渡辺、河野、村岡、図書部委員は大橋、末次、学連部委員は山崎、仙波、池田、出版部委員は高島、西本、会友部委員は淡、石田が就任したとある(前掲「総務部報告」10頁)。
- (54)前掲「総務部報告」10頁。
- (55)「学連部報告」11、12頁『会報』1924年12月10日、京都帝国大学社会科学研究会。
- (56)「一九二四(大正十三)年書簡」234～8頁、前掲『山本宣治全集』第7巻。しかし、第4講以降は当局から中止を言い渡され、残りの講演は11月中旬に京大学生集会所でおこなった。
- (57)京都府警察部特高課「京大及同大社会科学研究会及出版法並治安維持法違反事件概況(一九二六年九月)」52頁、廣畑研二編『戦前期警察関係資料集 第4巻 知事事務引継書』2006年10月、不二出版。
- (58)TO生「編輯後記」15頁『会報』1924年12月10日、京都帝国大学社会科学研究会。
- (59)「研究部報告」10頁『会報』1924年12月10日、京都帝国大学社会科学研究会。鈴木安蔵「学連事件——精神史的回想3」274頁『現代と思想』1979年9月25日、青木書店。
- (60)「十一月七日記念講演会」1頁『社会科学連合会会報』1924年11月25日、社会科学連合会。大原社研所蔵の同講演会ビラには「社会科学大講演会」のタイトルで、大山、猪俣、鈴木の名前と演題に加えて野坂鉄「社会主義の二方面」が記されている。
- (61)「研究部報告」10頁『会報』1924年12月10日、京都帝国大学社会科学研究会。資料には18日とあるが8日の可能性もある。
- (62)「一九二四(大正十三)年書簡」233頁、前掲『山本宣治全集』第7巻。
- (63)「学生の立場から反軍事教育の叫 全国に波及すべく各大学の同盟成る」『帝国大学新聞』1924年11月17日付。「一九二四(大正十三)年書簡」239頁。前掲『山本宣治全集』第7巻。
- (64)「演説に訪問に当局に迫る 学生軍事教育反対同盟活動」『帝国大学新聞』1924年11月24日付。翌年5月、全国学生軍事教育反対同盟(代表者戸叶武)は小冊子『軍事教育反対論集』(1925年5月、希望閣)を発行した。ここには大山郁夫の論文「教育の社会性と国家性——教育界当面の重大問題としての軍事教育計画」「学生の社会意識と当局の階級的専制——社会科学研究団体に対する文部省の圧迫」と長谷川万次郎「教育に対する軍国的侵略」にくわえて全国学生軍事教育反対同盟「抗議理由書」が付録として収録。抗議の理由として「教育の自治と学問の独立とのために」「軍事教育は学生に対して不当なる負担を課す」「軍事教育は学生の体育上有害である」「我々は、現役軍人の教育家としての資格を認め得ない」をあげた。
- (65)「文部省の圧迫全高校に延び思想研究の自由全く蹂躪さる 全国学生社会科学連合が圧迫に憤起」『帝国大学新聞』1924年12月15日付。
- (66)「一九二四(大正十三)年書簡」244頁、前掲『山本宣治全集』第7巻。

- (67)「上海会議一月テーゼ（一九二五）」42、5頁『現代史資料14 社会主義運動1』第5刷、1977年5月、みすず書房。
- (68) РГАСПИ, 495/127/111/8.
- (69) РГАСПИ, 495/127/123/13-15.
- (70) РГАСПИ, 495/127/124/38-45.
- (71) РГАСПИ, 495/124/98-106.
- (72)「総同盟内紛に関する報告書」『労働新聞』1925年4月25日付、関東地方評議会。
- (73) 前掲『労働運動四十年』39、40頁。
- (74)「徳田球一予審訊問調書」176、7頁『現代史資料20 社会主義運動7』1968年6月、みすず書房。
- (75) 谷口は1926年から28年までドイツに滞在し、「ベルリン社会科学研究会」の創立期メンバーとなる。加藤哲郎『ワイマール期ベルリンの日本人——洋行知識人の反帝ネットワーク』第2章（2008年10月、岩波書店）を参照。
- (76)「逸見重雄第二回訊問調書」『記録14』。
- (77)「逸見重雄聴取書 第五回」『記録14』。
- (78)「研究会日記」18頁『会報』3号、1925年、京都帝国大学社会科学研究会。これ以外にも、京大社研は、4月20日に「研究会紹介講演会」を開催し、京大社研委員から「京大社会科学研究会の紹介」、河上丈太郎「社会科学の人生価値」、新明正道「社会主義の「自由王国」」の各講演後、河上、新明両氏と茶話会を開いた。また、5月6日から8日まで山口仏教会館で自由大学講座を開催し、長谷川如是閑が「社会現象としての政治及び経済」、高橋亀吉が「我国資本主義の行詰とその転換の方向」、林要が「私有財産制度について」の題で講演した（「各部報告」36頁『会報』1925年6月30日、京都帝国大学社会科学研究会）。
- (79)「解説」大原社研編『日本社会運動史料 原資料篇 無産政党資料 政治研究会・無産政党組織準備委員会』1973年5月、法政大学出版局。
- (80) 前掲「Bの事務報告」には「政治研究会に於ける活動、政治研究会は従来、智識階級分子の集団であつたため、活動の余地が甚だ狭少であつたが、帰京早々関係労働組合を動かして、関東地方評議会を初めとしてBの指導の下にある組合が漸次、

政治研究会に入会することを決議したので、これから積極的な活動に入ることになるのである、これ迄政治研究会には労働階級の分子は旧アナルコ・シンジカリストの不純分子が多く全然研究会を攪乱することを以て常套手段としてゐたのである、これに反して今後はこれ等を抑圧して、建設的方面に尽すと共に、これを通じてBの宣伝及び煽動の指導能力を発揮することが可能だと思ふ。それに付いては今度の全国左翼分子の結合が最も重要な役目を演ずるのである。」とある。

- (81)「関西大遊説計画」57頁『政治研究』1925年1月1日、政治研究会本部。『政治研究』は大原社研所蔵のものを閲覧。
- (82)「研究会日記」18頁『会報』3号、1925年、京都帝国大学社会科学研究会。
- (83) 同上同頁。
- (84)「一九二五（大正十四）年書簡・資料」260、3頁、前掲『山本宣治全集』第7巻。
- (85)「京都支部」4頁『民衆政治』1925年5月18日、政治研究会。同誌は大原社研所蔵。この京都支部結成を皮切りに、同年6月28日神戸支部（支部委員長河上丈太郎、委員に新明正道、高山義三、木村錠吉らの名がある）が新たに設立され、祝辞演説に「京都支部 杉野忠夫」が列席している（「統一の実全くなつて西日本の新陣容整ふ」3頁『民衆政治』1925年7月15日、政治研究会）。
- (86)「第五回関東連合会総会」3頁『学生社会科学連合会』1925年5月21日、門屋博。同資料は大原社研所蔵。
- (87)「学生社会科学連合会関東連合会組織」3頁『学生社会科学連合会』1925年5月21日、門屋博。
- (88)「組織について」4頁『学生社会科学連合会会報』1925年7月1日、学生社会科学連合会。発行編集兼印刷人は清水平九郎である。同資料は大原社研所蔵。
- (89)「マルクス誕生記念学術講演会」3頁『学生社会科学連合会』1925年5月21日、門屋博。大原社研所蔵のピラには「マルクス誕生記念大講演会」のタイトルと各講演者とタイトルが列記されている。浅沼と斎藤の名前がなく、松岡駒吉と高畠素

之の名字があり、いずれも「題未定」である。

- (90) 「松本篤一第二回訊問調書」『記録 18』。
- (91) 「後藤寿夫第二回訊問調書」「清水平九郎第五回訊問調書」『記録 17』。
- (92) 「清水平九郎第五回訊問調書」『記録 17』
- (93) 「野呂栄太郎第三回訊問調書」「清水平九郎第五回訊問調書」『記録 17』。
- (94) 「野呂栄太郎第三回訊問調書」『記録 17』。
- (95) 「後藤寿夫第二回訊問調書」『記録 17』。
- (96) 「野呂栄太郎第三回訊問調書」『記録 17』。
- (97) 「衣谷賀真第四回訊問調書」『記録 16』。
- (98) 「是枝恭二第五回訊問調書」『記録 17』。
- (99) 「栗原佑第五回訊問調書」『記録 15』。
- (100) 「清水平九郎第六回訊問調書」『記録 17』。
- (101) 「山崎雄次第四回訊問調書」『記録 16』。
- (102) 同上。
- (103) 「山崎雄次第四回訊問調書」『記録 16』、「石田英一郎聴取書 第二回」『記録 3』。
- (104) 「山崎雄次第四回訊問調書」『記録 16』、「野呂栄太郎聴取書 第二回」『記録 12』、「石田英一郎第四回訊問調書」『記録 14』。
- (105) 「学生運動の意義 日本学生社会科学連合会第二回全国大会テーゼ」1 頁『学生社会科学連合会会報』3 号、1925 年 10 月 20 日、学生社会科学連合会。
- (106) 「泉隆第三回訊問調書」『記録 13』。
- (107) 「実川清之聴取書 第六回」『記録 15』。